



イペアンロー！ (いただきます)

今回は、おなじみの山菜の「コロコニ」、フキをしょうかいします。
春から夏にかけて、北海道の山には背の高いフキがたくさん生えます。アキタブキという種類で、大きいものは高さ1m以上にあります。くきのように見えるのは葉柄といって、葉を支えている部分です。アイヌ民族は、このコロコニの長い葉柄を食べるだけでなく、さまざまに活用しました。根は煮つめて薬に。大きな葉は、



「コロコニ」フキ根は薬、葉はテントにも

ものを包んだり、急な雨のときに東ねて雨がっぱにしたり。木の骨組みに葉を何枚も重ね、クチャ（テント）もつくりました。
食べるときは、オハウ（スープ）やおかゆに入れるほか、煮物やいため物にします。干して保存し、水でもどしてスープの具などにも使いました。太くて緑色のコロコニが、干すと細く黒っぽくなります。
この夏、キャンプに行ったらフキをとってみませんか？ 地面に生えているフキの根元をよく見ると、何本かに分かれて残して、「外フキ」をとりましょう。
フキの下処理はこんなふうにします。
①葉柄は洗って、なべの大きさに合わせて切り、5～8分ゆでる。
②やわらかくなったら、水にとって冷まし、1本ずつ皮と筋をむく。
下処理をしたフキは、水をはった容器に入れ、冷蔵庫で数日間、保存できます。細いものは輪切りにして、熱いごはんに混ぜて蒸らし、かおりの良い混ぜごはん。太いフキにひき肉をつめて、しょうゆと砂糖で煮つけるのもおいしいですよ！

カンピノシ(本) 人物伝 バチラー八重子

バチラー八重子（1884～1962年）は、アイヌ民族にキリスト教を伝えた伝道者で、短歌をよむ歌人です。胆振国有珠村（今の伊達市）に生まれ、父の向井モコツチャロ（富蔵）は荷物の輸送や馬の売り買い、漁業をして裕福でした。

ある日、ジョン・バチラー（1854～1944年）というイギリス人の伝道師がやってきます。後にアイヌ語の辞書をつくる人ですが、アイヌ民族にキリスト教を伝えるなら、アイヌ自身がアイヌ語で行うべきだと考えていました。

バチラーは、子どもにローマ字を教えたアイヌ語の読み書きをさせ、賛美歌や聖書もアイヌ語に直しました。アイヌ民族から信頼されるようになり、八重子も洗礼をうけます。一方、和人がつくったアイヌの学校はアイヌ語を禁止し、日本語と日本の歴史を教えました。

11歳のとき父が亡くなると、八重子は母を説得して親元をはなれ、バチラーが札幌につくった学校「アイヌ・ガールズ・ホーム」で学びます。かしこく気立てのよい八重子は、子どものなかったバチラー夫妻の養女になりました。

バチラー八重子の生涯

掛川源一郎著

八重子は伝道を手伝ううち、若いアイヌが祖先の伝えた文化への興味をなくしているのを見て、短歌でメッセージを残したいと考えます。アイヌ語学者の金田一京助に相談し、37歳のとき、歌集「若き同族に」を出版しました。ウタシパノ ウコヤイカタヌ ピリカプリ 忘るなウタリ 永久までも

（おたがいに尊敬しあう良い習慣を、仲間たちよ、ずっと忘れないで）
やがて、時代とともに教会に来る人は減りましたが、八重子は亡くなるまで子どものための日曜学校を続けました。未来のアイヌへの希望をもち続けた生涯でした。

著者の掛川源一郎は、室蘭出身の写真家です。今年発行された雑誌「現代短歌」5月号の特集「アイヌと短歌」で、「若き同族に」の全作品を読むことができます。

（1988年、北海道出版企画センター＝絶版）



バチラー八重子の生涯



「フムフム」はアイヌ語でのあいづち

アイヌ新法3年

差別の禁止

平等にあつかわれる社会に



ればならない」と決めました。それには、何が差別にあたるか話し合い、差別させない仕組みをつくる必要があります。でも、法律ができて3年たった今も、話し合いは始まっていません。だれかへの差別が無くなれば、自分が差別さ

れる心配も減ります。だれかの「誇り」が「尊重」されれば、自分のほこりも大切にされます。法律が目指した社会になるように、国や北海道のがんばりに期待しましょう。

きょうの目とば

仲間はずれ

社会には「北海道民はマイペース」などと、ある人々をまとめて決めつけることがあります。「アイヌ民族」や「女性」は能力が低いと考える人は、「この仕事はアイヌ／女性にはさせない」などと言います。

先生が児童に「アイヌみたいになるな」と言うこともありました。こんなふうに、特定の人々をばかにしたり、仲間はずれにしたりするのは、少し考えると良くないことだと気づくことができます。

では、これはどうでしょう。「アイヌ民族はもういなくなった」「日本には日本人（和人）しかない」。これは今でも耳にします。そこにいるのに無視されれば、人は傷つきます。「北海道には歴史がない」「無人の大地を開拓した」といった言葉も、アイヌ民族の歴史を認めず、傷つける言葉なのです。

見えないかべ

同じ立場（民族や性別など）の人が集まると、他の立場の人の忘れがちになります。そして、地位の高い人に近い人は、その輪に入りやすくなります。まるで、自動ドアが開くように。あなたが「和人」の「男性」だとしましょう。先生や医者、社長、政治家など「りっぱな人」の多くが自分と同じ立場です。そうした人と自分の言葉で話し、仲間としてあつかわれます。「なぜ日本にいるの？」「なぜ企業のトップに／病院に／政治の世界にあなたがいるの？」と聞かれることもあります。

「和人」の「男性」には開くドアも、他の人にはかべになることがあります。差別や仲間はずれを無くすには、そのかべに気づくことが欠かせません。